

# 文学の冷戦と安部公房

—「R 62号の発明」試論—

## 1 「心理戦争」と頭脳の支配

一九五〇年代の日本文学をめぐる研究が、近年にわかに活気を帯びてきた。とはいえ、これまであまり議論の対象となってきた来なかった五〇年代文学は、「多くの関係者が既に亡くなっているが、まだ現存の体験者や目撃者の心理的な傷が癒されず、沈黙のなかに放置されたままになっている」とする紅野謙介の指摘に集約されるように、半世紀を過ぎた今日、当時を知らない後の世代にとって極めて論じにくい対象となりつつある。事情は安部公房研究においても同様である。周知のとおり「デンドロカカリヤ」(一九四九)・「赤い繭」(一九五〇)・「壁」——S・カルマ氏の犯罪(執筆は一九五〇)といった一九五〇年以前の執筆作、そして六〇年以降の『砂の女』(一九六二)・「他人の顔」(一九六四)・「燃えつきた地図」(一九六七)などの知名度の高い作品については、これまで様々な角度から検討がなされてきた。しかし、その間を繋ぐ一九五〇年代、とりわけ一九五一年五月の安部の共産党入党から

木 村 陽 子

一九五六年、「知性」(十月号)に「日本共産党は世界の孤児だ」を発表し、党批判に転ずるまでの約五年間の研究は、安部自身が後年その問題に触れたがらなかったという事情も相まって、これまで十分な検討がなされてこなかった。近年、日高昭二が五〇年代の安部作品を網羅的に論じ、マクロの見地からその全体像を特徴づけたが、本稿では特に、五〇年代前半の安部公房に焦点を絞って検証を試みたい。

一九五〇年代前半といえば、朝鮮戦争に象徴されるように、世界を二分しての東西対立抗争が深刻化した時代だった。その影響は日本国内にも飛び火し、反共・反米の両陣営が互いに敵方の非道・残忍性を喧伝し合う宣伝戦の様相を呈していた(詳細は後述)。渦中にあった安部も例外ではなく、一方では「共産軍に対する絶望は、現実の一切に対する絶望であり、死である」<sup>(3)</sup>といった過度の親共的主張を、他方「日本に軍隊をつくりたがっているアメリカは、日本に慢性自殺者があえることをのぞんでいる。心理的な死の灰が日本全土にふりそそいで、日本人全体が集団慢性

自殺をすることを待ちのぞんでいる」といった反米的主張を声高に振りかざす、戦闘的党員作家の一人だった。

その安部が一九五三年、『文学界』三月号に発表した「R 62号の發明」<sup>5)</sup>は、書名の表す如く、ロボット(Rは頭文字 62号が「人間合理化」の機械を發明する物語である。しかしロボットとは言っても、人間を模した機械の謂ではなく、あくまでも脳に手術を施され感情を制御された人間である。怠業も示威行進も賃上げ要求もしない、そのうえ有能で主人に絶対服従する労働奴隷、それは指導者たちにとって、まさに夢のようなロボットである。

奴隷ロボットの物語と聞くと、あるいは今日の読者は意外の印象を受けるかもしれない。しかし、山本武利の論に詳しい、いわゆる「ブラック・プロバガンダ」<sup>6)</sup>の応酬が最高潮に達した五〇年代においては、敵方を独裁政権とその圧政下にある奴隷の大衆というステロタイプに規定し、人道的使命から奴隷解放戦の必要を訴えるということは、むしろ常套的なやり方だった。たとえば一九五二年十月、共産党第十九回大会で第二次世界大戦に言及したスターリンは、「ソヴィエト同盟は、独日ファシストの暴政を粉碎して、ヨーロッパとアジアの諸民族を、ファシストの奴隷にされる脅威からすくい出した」<sup>7)</sup>と豪語していたし、同じ頃、米大統領選挙に勝利したアイゼンハワーは、選挙戦中の演説で、東欧十ヶ国、および日本を含むアジア六ヶ国を「クレムリンの奴隷」と位置づけ、「奴隷化された世界の国々が全面的な自由」を取戻すまで、「われわれは決して手を休めることができない」と聴衆に訴えていた。<sup>8)</sup>「心理戦争」<sup>9)</sup>とも呼ばれたこうした宣伝戦の過熱

は、一方ではこの時代の世界規模での思想改造への関心を示すものであった。当時「洗脳」という言葉が、ある種の好奇とともに人々の恐怖の対象となったが、たとえば「R 62号の發明」の発表翌月に翻訳刊行されたE・ハンター著『洗脳』(一九五三、法政大学出版局)は、中国共産党の行った組織的洗脳の実態を反共的立場から告発した書であったが、本書中「洗脳」は頭脳を取り除き、つぶして、そこに憎悪と戦争熱とを充満させる「頭脳の手術」であると説明されている。安部が「R 62号の發明」で描いた「頭脳の手術」によった奴隷人間という表象も、こうした頭脳の支配への関心と無縁ではなかっただろう。小川徹は、一九四八年頃、安部が「人間は前頭葉切除をすれば、幸福になる」と発言したことに衝撃を受け、「後年、アメリカ映画の赤狩りや朝鮮戦争の洗脳に関心をいだいたのは安部のこのひと言」にあったと回想しているが、果たして本小説にも術後の「気分」を尋ねられた62号が「幸福です」と語る場面がある。こうした時代特有の思想改造への関心に考慮し、本小説に描かれる「ロボット」という表象を被洗脳者の寓意と見たとしても、あながち間違ではないだろう。

人間が他の人間の思考を完全に支配することは本来不可能である。それにもかかわらず、冷戦下宣伝戦の異様な過熱ぶりを観察すると、当時の為政者たちが宣伝の徹底によって、あたかもその実現を確信していたかのように思えてくる。ここでは一例として、一九五三年『改造』六月号に掲載された「新心理戦争特集」論文<sup>10)</sup>を主として参照し、当時の宣伝戦の概況を確認してみたい。

## 2 真の遠隔操縦者

およそ一千万人の諜報員を抱えたアメリカの宣伝戦の中心機関たる中央情報局（CIA）が設立されたのは一九四七年、加えて一九五三年一月、予てより対ソ宣伝戦の強化を主張していたアイゼンハワーが大統領に就任すると、より万全の体制を整えるために心理戦略委員会が設置された。これらの機関では「戦争にならない一切の謀略行為」が容認され、その中には橋梁・列車・軍需工場の破壊、果ては暗殺といった過激行為までが含まれた。片やスターリン政権下のソ連では、「憎めアメリカ」運動とも称された大規模な思想改造が展開されていた。ソ連の宣伝戦動員数もアメリカ同様およそ一千万人、その中心を担う煽動宣伝局では百四十万人が従事していた。煽動員の中には「会話員」と呼ばれる密偵が多数存在し、都会や田舎を歩き廻り、個々の人間に静かに近づき思想を浸透させたという。彼らの最大の武器は「スターリン・トランミッター」と呼ばれる世界最大の電波出力を持った巨大ラジオ放送局であり、ここから世界に向けて反米宣伝を繰り返したという。

一方では無数の諜報員が暗躍し、他方、敵方「スパイ」を恐れるあまり、過度の宣伝と思想弾圧が横行した時代。「R 62号の発明」が発表されたのは、そうした時代であった。以下本稿では、本小説に描かれた思想改造の問題に注目するとともに、一種思想戦の様相を呈した同時代状況とのかかりから小説「R 62号の発明」を検証してみたい。

### 2・1 所長の野望

「R 62号の発明」（二九五三・三）は、失業苦から自殺志願者となった機械技師が、大多数の人間をロボット化しようと目論む国際Rクラブの手によって天才技師ロボット62号として再生し、恐るべき「人間合理化」のための工作機械を発明する物語である。クラブの所長によれば、62号の脳には「一昔前の小さな放送局」に相当する人工頭蓋骨などの、「米国本社から直輸入」の「驚異的な装置」が装着されている。そして「いかにしてのろまな人間から限界をこえた能力を引出しうるか」という問題に対する「完全な条件反射」がインプットされた62号に自由に仕事をさせ、且つ朝十時から午後五時まで所長が指令箱から遠隔操縦することによって、「人間合理化」のための大発明がなされる計画であった。しかし、62号が実際に発明したのは、恐ろしく高度な操作を人間に強制し、遅れば容赦なく指を切り落とし、さらに遅れば命まで奪う工作機械であり、完成披露の式典で何も知らずに仕事台上に立った製作所社長を血祭りにあげてしまう。

ところで、この62号が発明した工作機械については、概ね先行論では製造者の意図に反したものであったと捉えられてきた。たとえば本小説を「機械化した人間が逆に資本家をやっつける」物語であると読んだ椎名麟三は、「所長の意志とは違った妙なものをつくった」62号に、反逆・復讐等、何らかの「意志」を読み取ろうとしたが、そうした当然あるべき62号の「意志」が、本小説

には「非常に不明瞭」にしか描かれていないとして不満を漏らし<sup>14</sup>ている。一方、荻正は62号の行為を「ただ『Rクラブの綱領』に忠実に『人間合理化』の機械を製作しただけであり、製造者に反逆するどころかあくまで従順」であつたとし、第三者に思考を制御された彼に何らかの意志を読み取ることの誤りを指摘した上で、次のように言及している。

にもかかわらず、結果的に彼が製造者を裏切ることになるというのは、ロボットの反逆や復讐というより人間の自滅というほうが適切であり、「復讐劇のパロディ化」（有田忠郎）といえるかもしれない。あるいは、物語の背景にある労働者対資本家という構図を考えるなら、それは資本家の自滅という言い方もできるだろう。<sup>15</sup>

〔傍点引用者〕

椎名や荻が、62号の発明品を製造者の意図に反するものと捉えた理由は、製作所社長の惨死に肝をつぶした所長が、発明品の意図を理解できずに「何をつくるつもりだつたんだ！」と絶叫して幕を閉じる、本小説結末部の解釈に由来しているものと思われる。すなわちこれらの論では、所長と62号との間の意思疎通の破綻が、資本家（＝所長）と労働者（＝62号）という二項対立における労働者の勝利、あるいは資本家の自滅といった図式で理解されているのである。しかし、本小説に描かれたパワーゲームは、果たしてそれほど単純なものであつたのだろうか。前掲論では所長を「資本家」一般に還元してしまっているからいがあるが、そも

もこの「所長」なる人物は、惨殺された製作所社長がそうであつたのと同等の意味での「資本家」という括りで捉えてしまうには、その行動においてあまりに不可解な点が多い。本稿では、62号の発明品が、果たして本当に製造者の意図に反するものであつたのか否かを確認するために、その前提として、そもそも所長が何を企図していたのか、その野望の全貌について検証してみることとする。

「戦争中かかなりの軍人だつた」とされるこの所長は、一方で「私は思想問題以外には興味がない」と硬派を気取りながら、他方、「日本婦人の美德」を備えた娼婦ロボットを外国人に斡旋しよう<sup>16</sup>と企むなど、硬軟合わせ持ったなかなかの策士である。また62号に引き合わされた製作所社長が、「あの男はたしか、去年あなたの方から話があつたとき、すぐに誠にした男のはずですぜ」、「なんでもあれの弟つてのが、組合運動かなんかやつてるとかで」と所長に抗議していたように、彼は「赤」追放を資本家に急き立てる反共主義者でもあつたよう<sup>17</sup>だ。そしてクラブ第一回大会での演説で「植民地復活」、さらには「再軍備」や「突撃隊員」の編成にも意欲を示していた点から推して、所長の「人間合理化」計画は、労働ロボットや娼婦ロボットのみなならず、傭兵ロボットの大量生産といったところまで視野に据えられていたと考えられる。

こうした所長の人物造形、さらには政界・財界との癒着の模様からは、アメリカの再軍備要求を政治的復活の好機と捉え、自らが新しい軍隊の中核に座ろうと奔走した、服部卓四郎元大佐を中

心とした旧軍高級将校グループの存在を想像することもできる。

一九五〇年二月、その暗躍をマスメディアに暴露された彼らは、復古調・精神主義と植民地的・コスモポリタニズムとの帝国主義的統一を体现するものとして、特に共産党周辺から批判を浴びた。安部も当時のエッセイの中で、「漢文だとか軍備だとか、思出すかぎりのものの復活」をはじめた「硬骨漢」と、「植民地的な崩壊によつてのみ生きる混血児」とを「同じ子宮から生れた兄弟」であると戯画化している。軍国主義と植民地主義が表裏の關係を成すという批判は、本小説で旧軍人である所長の傍らに、「ヘンリー・石井」という混血児らしい「米国本社」派遣のドクトルが寄り添っていたことにも、あるいは通じているかもしれない。

ところで安部が描いたファッショ的人間像として最も連想しやすいのは、後に戯曲として結実した「どれい狩り」(一九五・六)に登場する「閣下」である。元陸軍大佐であるこの「閣下」は、「見かけは人間そっくり」だが中味はまったく人間ではないという「ウエー」なる生き物を詐欺師から買い取り、それらを大量繁殖させ、訓練して労働者や兵隊にして「アメリカあたり」に輸出し、日本を「普通り」の「世界の一等国」に押し上げようと画策する。こうした「閣下」と所長は、ともに旧高級軍人であった点、また国家規模での奴隷の大量生産を企み、自身がそのボスに就任しようとした点など、人物造形の点で多くの共通項を持つ。「あらゆる天然資源の中でもっとも安価」な「人間」を用いたクラブの「事業」は「十二分に採算がとれる」とする所長の発

言、さらには「どれい狩り」の「閣下」の野望を補助線として「人間合理化」の機械の全貌を想像するならば、結局それは、奴隷の大量生産に資する工作機械であったと考えられる。

## 2・2 心理兵器の発明

ところが、こうした所長の思惑を裏切り、62号の発明品は製作所社長を血祭りにあげてしまう。生きていてこそその「人的資源」を殺してしまったのでは元も子もなく、所長が色を失い「何をつくるつもりだったんだ!」と62号に絶叫したのも無理からぬことだった。それではやはり、62号の発明品は製造者の意図を裏切る失敗作であったのだろうか。ここで今一度問い直さなければならぬのは、62号の製造者が果たして本当に所長であったのかという問題である。前述したように、62号の脳には「米国本社から輸入」の「驚異的装置」が装着されている。しかもそれを行ったのは「米国本社」派遣のドクトルである。これらの点から想定し得る仮説は、62号の製造者にして真の遠隔操縦者は、所長ではなく、「米国本社」であったということである。所長が製作所社長に「これの頭は完全にアメリカ製だよ」と自慢していたことから推測可能なように、指令箱を操縦する所長の位置は、本人の思惑を超えて、言わば発信局と受信局とを繋ぐ中継局に相当するものであったと考えられる。

では仮に真の製造者／操縦者が「米国本社」であったとして、さらなる問題はこの一見手の込んだ処刑マシンにしか見えない62号の発明品が、果たして本当に「人間合理化」の機械であった

のかという疑問である。本稿が注目するのは、製作所社長の凄惨な死を目の当たりにした際の、所長やクラブ会員らの以下のような反応である。

頭取は両手で顔をおおい、指の間からのぞいてうめきつづけていた。彼は無条件に感動していたのだ。サギだなどと思つたことをふかく後悔したほどだった。所長も激しい靈感にひたつていた。唇がかわくのでたえずなめながら、ついでにぬらした指で鼻の穴をしめした。他の連中も大同小異の驚きに慄いていたに相違ない。<sup>(18)</sup>

驚いたことに、彼らは激怒するどころか、集団催眠術にでもかかったかのように思考停止に陥り、戦慄とともに快感すら味わつていたのである。惨劇を目の当たりにした彼らの、右のようなインモラルな反応から推測するならば、この工作機械は「運転者を」ではなく、<sup>(19)</sup>「それを見る者たちを」判断停止、すなわち「合理化」へと導く、一種の「心理兵器」であつたと考えられる。

前述したように、「心理戦争」とも呼ばれた当時の過熱した宣伝戦においては、敵・味方の別なく、人間の頭脳の支配というものに異常な関心が向けられた。それゆえ両陣営ともに、人間の心理に甚大な影響を与える「心理兵器」の存在を強く恐れた。では具体的に「心理兵器」とは何を指すのか。ある時には、それは一冊の小説だった。当時共産党は、共産主義への狂信的憎悪を掻き立てる反共小説の存在を強く警戒していたが、事実、欧米諸国で

は今日の我々の想像を越える、絶大な政治的效果を上げていたと言われる。特にオーウェル著「一九八四年」は、一九四八年に英国で刊行されるや瞬く間に六十二ヶ国で一五〇〇万部を売り上げ、「ソ連の西ヨーロッパ征服を防ぎとめた」根本要因であるとさえ語られていた。<sup>(19)</sup>

一方、当時安部は、水爆をして「それを見ただけで魂が凍り、石に変わるというメドゥサの頭のように、なにか魔法的な力」を持つもの、「単に家や工場や人間の肉体を破壊させるだけでなく、人間の心をも亡ぼしてしまう、心理兵器」であると主張していた。さらに、「アメリカのたび重なる水爆実験は、ただ水爆製造業者のフトコロを肥やすだけでなく、たしかに民衆の集団的慢性自殺をねらつた、心理戦争だ」<sup>(20)</sup>とも言及している。水爆を「心理兵器」と見るような安部の発想を踏まえるならば、本小説の新作工作機械もまた、日本人全体の「集団的慢性自殺」をねらつた、「見ただけで魂が凍り、石に変わる」、「魔法的な力」を持った「心理兵器」であつたと考えることはできないだろうか。すなわち62号の発明品の正体は、その機械を用いた残酷な見世物の衝撃によつて、それを見るあまたの人間の「心をも亡ぼしてしまう」、もつとも合理的な方法による奴隷製造機であつたと考えられるのである。

いかにドクトルが優れた脳外科医であつたにせよ、一人一人の脳に「一昔前の小さな放送局」に相当するような高額な装置を装着していたのでは、たとえ「人的資源」が無尽蔵であつたにせよ、莫大な労力とコストを要する点で甚だ不経済である。そこで

「米国本社」は、より安価で合理に適った奴隷製造機の發明を求め、その実現が前述の工作機械であつたのではないか。62号が特に「コストと能率の点を考慮」したと語るように、彼の發明品は「一番コストの安い人間」を「ふんだん」に消費し、しかも低コストで大量の奴隷を生産する点で極めて合理的である。こうしたプロジェクトの遂行の結果、最終的に完成するのは、日本一国のロボット化と「米国本社」の遠隔操縦という大規模な主従構造であつただろう。

以上のように考えるならば、62号の發明品は、奴隷の大量生産に資する機械という点で、所長の意図にも「米国本社」の意図にも適つていたと言えよう。ただし、その用途の点で、所長は眞の製造者である「米国本社」の意図を理解してはいなかつた。結末部、労働者たちが配電盤のスイッチを切つたためであらう、一同は集団催眠術から一氣に覚醒し、ちりぢりばらばらに逃げ去つていったが、ただ一人、逃げるのも忘れ茫然自失の態であつた所長は、恐らくこの戦慄すべき「米国本社」の陰謀を瞬時に理解したのではなかつたか。所長の最後の言葉「何をつくるつもりだったんだ！」という絶叫は、もはや眼前の62号に向けられたものではなく、「米国本社」に発した激憤と戦慄の怒声であつたと言えよう。

### 3 「インテリ」という中間者

前節で論じたように、62号に対する眞の指令者が、「驚異的装置」の製造者である「米国本社」であつたとするならば、さらな

る疑問は、なぜこの装置を装着する対象が、失業を苦に自殺を志願した機械技師でなければならなかつたのかという問題である。

ところで、この「機械技師」という称号であるが、先行論では労働者対資本家という二項対立から、これを労働者の地位に置く発想が優勢であつたが、改めてその意味を確認すると、「機械に対する高度な専門技術を習得した者」を指し、それは当時の認識においては一般労働者とは区別された、知的生産者ともいふべき優越的意味合いを強く有していた。確かに彼は、次の組合の役員選挙で「細胞」に入れようと考えていた点からも、雇用主に対する何らかの反発を腹藏した雇用者の一人であつたことは間違いない。しかし国際Rクラブ大会での演説で、所長が「労働者は機械の血液、技術者はそのホルモンであり、さらにわれら選民はその心臓と魂である」と宣言しているように、あるいは契約係の草井が機械技師を「インテリ」と呼び換えているように、小説世界において、彼は厳密には「技術者」乃至は「インテリ」として、資本家と労働者の間の中間者として位置づけられているのである。

無論、技術者としての矜持は本人にもあつた。自殺の動機として男は「死んだつて解決しないくらい、分つてゐるが、ばくみみたいに専門化しちゃうと、まるで弱虫になるんだな」と語つたが、こうした発言からは彼の絶望の内実が、失業の結果として生じる具体的な困難にあつたというよりは、むしろ「技術者」という特権職を剥奪された挫折感にあつたと想像される。ページのリストにあがる程度には「細胞」に近い立場にあつたのだらう機械技師には、闘う労働者たちの戦列に加わるという選択肢も残されていた

はずである。にもかかわらず彼が死を選択したのは、草井が彼を「失業で死んだインテリくらい、純粹で人間的なものはありませんか」と揶揄したように、「インテリ」ゆえの弱さの露呈でもあっただろう。

一方、事務所の側でも、自殺志願者の選抜に際して自殺動機を「失業」に限定し、且つ「機械技師の特別募集」など職業も限定していたことからして、最初から失業を苦に自殺を思い立つてしまうほどの、青白きインテリを標的としていたものと思われる。ところが前述したように、弟が「赤」だという理由で機械技師をパージするよう促したのは所長自身であり、そうであるならば、所長は一方で左傾化した（あるいはする恐れのある）インテリのパージを資本家に急き立てつつ、他方で絶望したインテリの駆り集めに奔走していたことになる。この一見不可解な所長の行動は何を意味しているのか。恐らく彼の目的は、左傾化したインテリという資本家にとつての憂いの芽を早期に摘み取り、彼らの感情の発動を制御し思想を骨抜きにした後に、その知性・技術のみを有効活用することにあつたと考えられる。「ロボットは要するに純粹理性のことだ」とするドクトルの言にも表れているように、思想を骨抜きにされたインテリほど、優秀なロボットとして恰好の逸材はない。

以上のことから推測するならば、「米国本社」の「驚異的装置」開発の目的の一つには、左傾化したインテリの思想改造があり、「米国本社」はそれを労働運動の高揚に頭を痛める日本の支配層に売り込むと同時に、自らの支配権確立をも視野に入れた、

日本における共産勢力の一掃を意図していたと考えられるのではないか。

手術を終えた62号は、「富士山の色つき写真」が飾られ、あとは「見はらしのいい大窓」があるばかりの殺風景なクラブのビルの一室に暮らしている。戦時中「祖国の霊峰」として君臨し、今は米軍演習場と化した富士の山、それは精神主義者を気取る所長の、戦中から戦後にかけての有り方にも通底する風景である。またその部屋の「見はらしのいい大窓」からは、通りを隔てて瞬く「フロリダホテルのネオン」や、「波をうつついてく、赤旗とブラカードの行進」が見える。頭上に聳えるアメリカの象徴と眼下を埋める共産主義の行進。そして豪奢なホテルに寄り添うように建った、古ぼけた三階建てのクラブのビル。その窓辺にたえずみ群衆を見下ろす62号は、党への共鳴者であつた頃の記憶が蘇つたのか、突如不安に襲われ頭を抱えるが、異変を察知した管理者の制御によって、次の瞬間には思考を切斷・消去されてしまう。こうした光景は、二つの世界、あるいは二つの階級の間に板挟みとなつた、中間者としての62号の位置を空間的に表象するとともに、米ソ思想戦の代理戦とも言ふべき、日本国内に生じた苛烈な「心理戦争」を寓意化するものでもあつただろう。

ところで、左傾化したインテリの思想改造に暗躍する「米国本社」というモチーフから連想しやすいのは、本小説発表当時、世間を大きくにぎわしていた鹿地事件である。本事件は一九五二年十二月五日、GHQに関わる情報機関施設の元従業員が、一年以上も行方不明中の共産黨員・鹿地亘が在日米国情報機関に不法監



禁されていると記者会見で発表、すると二日後、突如鹿地が帰宅、米国諜報機関に監禁され対米忠誠を強要されたと訴え、国会も調査に乗り出した事件だった。鹿地救済を訴え出た元従業員の手記によれば、同機関は「あらゆる権力に物をいはせ、さまざまな手口行為、拷問、脅迫により、われわれの同胞を機械化し、彼等の手先を養成する恐ろしい機関」であり、彼の任務は「囚われた同民族の監視」「同胞を鉄のベッドに横にさせ、手錠でベッドの鉄架にくくりつける仕事」であったという<sup>21)</sup>。

前述したように、当時は反共・反米の両陣営が激しい中傷合戦を展開した「心理戦争」の時代であり、本事件も他の事件同様に真相は藪の中である。しかし少なくとも、鹿地事件によって日本国内に暗躍する諜報機関の存在に注目が集まったことは確かであり、一九五三年にはそうした影響も作用してか、諜報機関関連の暴露本の出版が相次いだ<sup>22)</sup>。安部の本小説執筆の動機も、無論そうした同時代状況と無縁ではなかったはずであり、左傾化したインテリを脳手術によって奴隷化するという、一見奇を衒ったかのような本小説の設定も、同時代においてはそれ相応のリアリティをもつて受け止められたものではなかっただろうか。

#### 4 共産党の失墜とインテリ批判

本稿はここまで、小説「R 62号の発明」を思想改造の問題を中心に検証するとともに、物語世界の背後に垣間見える東西思想戦の様相に注目して解説を進めてきたが、前述したような同時代状況と本稿のここまでの読みとを考え合わせるならば、本小説を反

米色の濃厚な一種のプロパガンダ小説と見ることも可能だろう。しかしここで改めて疑問に思われるのは、「人間合理化」の機械の発明者が、なぜ失業を苦に自殺を志願した機械技師でなければならなかったのかという問題である。仮に安部の執筆意図が反米宣伝のみにあつたとするならば、恐ろしい殺人機械の発明者は、たとえばドクトルのような「米国本社」派遣の技術者の方がわかりやすかつただろうし、左傾化したインテリに頭脳の手術を施しロボットとした上で彼に発明させるなどと、ことさらに込み入った設定を取る必要もなかっただろう。やはりそこには、この機械技師に対する安部の批判意識を読み取る必要があるのではないだろうか。

ここで想起されるのが、小説発表の五ヶ月前、一九五二年十月の衆議院議員選挙での日本共産党の歴史的惨敗と、その直後に発表された安部の「インテリ」批判の言説である。本小説に描かれたページ、失業、自殺、暴動の場面にも窺えるように、この時期の日本では一万二千人を超えるページを受け、共産党が武装路線に転じ、さらに生活の防衛を訴える労働者のストやデモが先鋭化し、政府や資本家らとの間で激しく対立した時代だった。特に発表前年の一九五二年前半には、四〇〇万の労働者を動員した労働ストや血のメーデー事件の勃発など、一触即発の臨戦状態に一時陥った。労働者決起の気運に勢い込んだ共産党は、一九五二年五月から七月にかけて火炎ビン闘争などの過激な武装闘争に打って出たが、そうした戦略が裏目に出、政府側がそれを逆宣伝に利用し共産党を装った「でっちあげ」暴力事件<sup>23)</sup>までが発生する中、七

月四日には破壊活動防止法が成立した。折しも党内は「スパイ」潜入疑惑によって、査問やリンチ、除名処分など著しい混乱が生じていたところに、加えて過激組織としてのイメージの悪化が致命傷となり、十月の衆議院選挙で共産党は改選前の三十五議席から、一転、全員落選の窮地に追い込まれた。

選挙直前まで大衆への絶大な信頼に基づく楽観論を繰り返していた安部にとつて、この結果はかなりの衝撃を持って受け止められたと想像されるが、意外にも「総選挙直後の感想」として彼が口にしたのは、彼らのいう「レジスタンスの闘い」に加わらず、態度決定を留保したインテリ作家たちへの失望・苛立ちであった。五月の時点では破壊法反対の呼びかけに作家をはじめ多くの文化人が応じていたが、以後顕著となった共産党の武装化への倦厭ムードから、選挙直前には彼らの多くが運動から離れていた。

安部曰く、「植民地のリヤクダツ、帝国主義戦争」が「全国民のドレイ化を通じて行われようとしている」今日、「レジスタンスの魂を民族の中によびさます」使命を果たすべき作家が、「帝国主義」の「ドレイ」に墮してしまった。しかも作家という「特別待遇のドレイ」である彼らは、自身の「ドレイ」的認識を「良心」の表現であると疑いもせず、作品を介して読者に「沈黙と忘却と絶望を強制」している。「こうしたものと闘わなければならない」と安部は回答したのである。<sup>(26)</sup>

留意すべきは、安部が衆院選での共産党惨敗の要因を、宣伝戦における敗北の結果と見なしている点である。しかもそこでの立役者は、「中立主義」という第三の選択肢があたかも存在するか

のように喧伝して国民を攪乱し、結果的に国民の団結の気運を妨害した作家たちであると安部は主張したのである。事実、この時の選挙で「米ソいずれにもつかぬ自主中立の平和外交方針」を主張した左派社会党が、世論の支持を得て大躍進している。嫌ソ嫌米ともいふべきこうした「中立主義」思想の台頭を、当時共産党周辺では「プチ・ブルジョア的な日和見主義」として激しく非難したが、<sup>(26)</sup>安部の見解も同様であり、彼らは一見「自由」や「良心」の擁護者を装いながら、その実、対立の中で虚無に陥った、か細きインテリの自己欺瞞であると糾弾した。<sup>(27)</sup>以後安部は繰り返して、「中立主義」的インテリ作家に批判の刃を向け、彼らの作品を「反共小説」であると糾弾した。たとえば、当時一般には反戦思想の書と認知されていた張赫宙の『嗚呼朝鮮』、ゲオルギウの『二十五時』を安部は反共小説であると一蹴したし、<sup>(28)</sup>国民文学論争の中では福田恒存に食ってかかり、「彼こそは『第三の道』を行くもの」、「大衆の中の意識の混乱と分裂を意図」するものであるとし、「社会ファシストのイデオログ」となる日も近いとした。<sup>(29)</sup>

一方、共産党の惨敗以降、最初に書かれた小説「イソップの裁判」(一九五二・十二月号「文芸」)では、エッセイでの「ドレイ」への言及に呼応するかのよう「ゼウス」と「ドレイ」との対決の様子が描かれた。また同じく十二月、書肆ユリイカより刊行された『飢えた皮膚』収録の改稿版「デンドロカカリヤ」には、鳥羽耕史が指摘しているように、初出時の「様々なイデオロギーが乱立しせめぎ合っている構図」から「コモン君と植物園長という

大きな対立関係へと収斂させた」大幅な改稿がなされている。<sup>(30)</sup> テクスト中、コモン君が自身を「奴隸」、植物園長を「ゼウス」の手先に見立てている点に留意するならば、改稿版「デンドロカリヤ」もまた、「ゼウス」と「ドレイ」との対決の物語のバリアントであり、しかもコモン君は、生きながらに自殺者の罪に問われ「奴隸」へと堕してしまっている点で、R 62号に近似した人物造形であったと言えるよう。

こうした経緯の後、言わば奴隷物語の集大成として一九五三年三月に発表されたのが「R 62号の発明」であった。前述したように、主人公の機械技師はインテリゆえの脆さを露呈し、闘わずして絶望の虜となった。しかもロボットとして再生した後には、彼は「全国民のドレイ化」を目論む敵の命ずるままに、人間に「沈黙と忘却と絶望を強制」する「人間合理化の機械」を発明したのである。このように考えるならば、本小説には闘いを放棄することとで間接的に「帝国主義」に荷担した、同時代インテリ作家たちへの安部の痛烈な批判意識が込められていたと見ることができるとではないか。

- 註(1) 紅野謙介「五〇年問題」と探偵小説——戦後文学におけるジャンルの交錯」(二〇〇四、吉田司雄編著「探偵小説と日本近代」二二八頁。
- (2) 日高昭二「幽霊と珍獣のスペクタクル——安部公房の一九五〇年代」(二〇〇四・十一月・十二月号「文学」)。
- (3) 安部公房「インテリの混乱と曖昧」(一九五二・十・二十「橋新聞」)。引用は「安部公房全集3」(一九九七、新潮社)三〇九

頁。以下引用は原則全集に拠る。

- (4) 安部公房「死の灰」(一九五四・六月号「文学の友」)、「安部公房全集4」(一九九七、新潮社)三〇九頁。
- (5) 初刊は「R 62号の発明」(一九五六、山内書店「現代作家シリーズ1」)。再刊は「安部公房全作品3」(一九七二、新潮社)、新潮文庫「R 62号の発明・鉛の卵」(一九七四、新潮社)、「安部公房全集3」(一九九七、新潮社)。
- (6) 山本武利「ブラック・プロバガンダ——謀略のラジオ」(二〇〇二、岩波書店)。
- (7) ソヴェト研究者協会編訳「ソヴェト同盟共産党第十九回大会議事録」(一九五三、五月書房)一五頁。
- (8) アイゼンハワー・ダレス共著「アメリカ外交の新基調」(一九五三、時事通信社、長谷川才次訳)七八・八〇・八六頁参照。
- (9) 前掲「ブラック・プロバガンダ」によれば、アメリカの戦時プロバガンダ作戦は「心理戦争(psychological warfare)」と呼ばれ、「プロバガンダ」という用語が「心理戦争」に代わり軍の公式文書に使われるようになったのは一九五〇年代以降であったという。
- (10) 小川徹「通俗化と変貌のゆくえ——三島由紀夫と安部公房・その映画化と原作」(一九七四・三月「国文学 解釈と鑑賞」)一〇四頁。
- (11) 「改造」(一九五三・六月号、九四一—一〇一頁参照)。
- (12) 佐藤定幸「アメリカの対ソ圏心理戦争」(一九五三・六月号「改造」)九五頁。
- (13) 高田市太郎「ソ連の心理戦争」(一九五三・六月号「改造」)九一—一〇一頁。
- (14) 椎名麟三「創作合評」(木下順二・手塚富雄)(一九五三・四月号「群像」)二七五頁。
- (15) 荻正「安部公房「R 62号の発明」論——実用性について」(二〇〇二、「国語国文学研究」三七号)一四三頁。
- (16) 井上清・小此木真三郎・鈴木正四「現代日本の歴史 下」(一九

五三、青木書店）五〇六頁。

(17) 安部公房『魔法使の盲点』（一九五二・四月号『文芸』）。前掲

『安部公房全集3』一八九頁。

(18) 前掲『安部公房全集3』四三三頁。

(19) 清水幾太郎『ジョージ・オーウェル「一九八四年」への旅』（一九八四、文芸春秋）二二六二頁。

(20) 前掲『死の灰』、前掲『安部公房全集4』三〇九頁。

(21) 鹿地亘・山田善二郎共著『だまれ 日本人！』——世界に告げる「鹿地事件」の真実——（一九五三、理論社）五四・五六頁。

(22) 一例を挙げると、ウイロビー「赤色スパイ団の全貌——ソルゲ事件」（一九五三、東西南北社）、クルトジンガー「スパイ戦秘録」（一九五三、国際新興社）、加瀬俊一「スパイ秘話・クレムリンの尖兵」（一九五三、要書房）、山田泰二郎「アメリカの秘密機関」（一九五三、五月書房）など。

(23) 百瀬孝『事典 昭和戦後期の日本 占領と改革』（一九九五、吉川弘文館）一一二頁。

(24) 『戦後革命運動事典』（一九八五、新泉社）、「普生事件」の項参

照。

(25) 安部公房『衆院選挙のあとに』（一九五二・十月号『現在』）、前掲『安部公房全集3』三〇六―三〇七頁。

(26) 岡倉古志郎『第三勢力』（一九五三、要書房）三・四・十五頁参

照。

(27) 安部公房『インテリの混乱と曖昧』（一九五二・十一月二十日号

『橋新聞』）、「国民文学の問題によせて——二つの竹内好批判」（一九五二・十一月号『文学』）を参照。前掲『安部公房全集3』

三〇八・三一二頁。

(28) 前掲『インテリの混乱と曖昧』、前掲『安部公房全集3』三〇

八・三〇九頁。

(29) 前掲『国民文学の問題によせて』、前掲『安部公房全集3』三一

二・三二三・三二六頁。

(30) 鳥羽耕史『デンドロカカリヤ』と前掲絵画——安部公房の「変

貌」をめぐる——（二〇〇〇年、『日本近代文学』六二号）一〇

九頁。

## 新刊紹介

高田衛著

### 『完本 八犬伝の世界』

中公新書版『八犬伝の世界』が刊行されたのが二五年前。挿絵を発端に、八字文殊曼荼羅の基層イメージという視点から、高田氏は『八犬伝』の構想を鮮やかに読み解

いてみせた。その論が研究史に残した足跡は大きい。絶版となっていた同書が、このたび増補改訂を施され再刊された。

八字文殊曼荼羅を中心とした論は本書にも引き継がれている。しかし、本書全体に行われた増補は非常に大幅なものである。

まず、『八犬伝』後半部への考察が大きく加えられている点。また、新書版刊行以後の学界での研究成果も多々取り入れられている（特に信多純一氏の典拠研究は、新書

版での説を補強するものとして重視されている）。そして一般読者への配慮から、読本や『八犬伝』の解説が懇切となり、全体の記述は平明に改められた。

以上の改訂を経て、本書は著者の『八犬伝』論の集大成と呼ぶべきものとなっている。『完本』と冠するに相応しい内容である。

（二〇〇五年）一月 筑摩書房 文庫判  
五七二頁 税込二五七五円（六戸道子）